世界のクロサワが描いた “*Macbeth*”

外国語学部　英語英文学科　4年
佐田　舞夏

Ⅰ　はじめに

イギリスの有名劇作家ウイリアム・シェイクスピアは誰もが知るイギリスルネサンス期の有名な作家である。彼の作品は時を経てもなお各国で鑑賞され、また演出家のアレンジが加えられ何度も上演されている。日本の映画監督である黒澤明の作品『蜘蛛巣城』は、シェイクスピアの“*Macbeth*”をもとに作られた作品とされており、本論文ではシェイクスピアと黒澤明の作品を比較しながらその魅力に迫っていく。

Ⅱ　世界のクロサワ

日本人だけでなく、映画を愛する人間であれば一度はその名前を耳にしたことがあるであろう。彼は戦前から戦後にかけ活躍した映画監督であり、この論文の主人公とする人物である。初監督作品『姿三四郎』（1943年公開）の大ヒットで彼の監督人生は幕を開け、その後も『羅生門』（1951年ベネチア国際映画祭でグランプリを受賞）や『七人の侍』(1954年ベネチア国際映画祭で銀獅子賞受賞）など世界的に認められる作品を多く生み出した。この論文で取りあげる『蜘蛛巣城』（1957年公開）、『乱』（1985年公開）も世界的に公開されアメリカの「タイム誌」も「もはや疑いの余地はない。日本の黒澤明は、セルゲイ・エイゼンシュタインやD・W・グリフィスといった至高の映画監督と並べて評されるべき人物である。（『蜘蛛巣城は』）シェイクスピア劇を映画化したものの中で最も素晴らしく、独創的な作品である。」（ガルブレイス4世309頁）と高く評価した。

その偉大な人物は東京の裕福な家に生まれた。末っ子ということもあってか幼いころは泣き虫で勉強が苦手で学校が嫌いだった。しかし後の恩師となる立川先生に絵の才能を褒められ絵を描くことが好きになる。映画好きの兄が自殺したことをきっかけに、絵から動き出す表現が可能な「映画」の存在に情熱を抱き始め、1936年、ＰＣＬ映画製作所の「助監督募集」の張り紙に応募し見事狭き門を潜り抜け映画の世界に突入した。初監督作品である『姿三四郎』は戦争に絶望する人々を痛快なアクション映画で勇気づけ大ヒットとなる。敗戦後も映画を撮り続け、パートナーともいえる三船敏郎と出会いその後多くの作品を三船と共に作った。黒澤が三船と初めて出会ったのは新人俳優のオーディション会場で、当時の三船は若さ有り余って荒れ狂い猛獣のようで当然審査員たちは三船を不合格とした。しかし黒澤はそのエネルギーと素質に魅力を感じ審査員に掛け合い自分が責任を持つということで補欠合格となった。黒澤は映画を作ることに加え、人間の才能を見抜く力も長けていた。三船は『蜘蛛巣城』の主人公「鷲津武時」も務めており、また本論文でも使用した『黒澤明と三船敏郎』という本が出版される程に、黒澤とはパートナー的な存在の俳優へと成長した。黒澤が見つけ出した原石である三船も人気俳優となり、第22回ベネチア国際映画祭の男優賞を日本人で初めて受賞し、その名を世界に知らしめた。しかしトップスターとなった三船を１つの現場にとどめることは難しくなり、『赤ひげ』（1965年公開）を最後に２人のタッグは終了した。黒澤と三船の作り上げた作品は今も多くの人に鑑賞される傑作ばかりである。[1]

Ⅲ “*Macbeth*”と『蜘蛛巣城』

さて本題に移ろう。今回取り上げるウィリアム・シェイクスピアの“*Macbeth*”と黒澤明監督映画『蜘蛛巣城』は、同じストーリー、同じ役割の登場人物でつくられている。シェイクスピアの“*Macbeth*”という作品を読んだことのある人なら、『蜘蛛巣城』がこれをもとに作られたという推測はできるだろう。しかし、黒澤明はこの作品を制作するにあたって“*Macbeth*”のリメイクだと公表することはしていないことが以下よりわかる。「『蜘蛛巣城』は翻訳作品というより、原作を示唆する作品である。シェイクスピア劇からそっくりそのまま取ったようなシーンもあるが、あくまでもビジュアルに強く訴える映像作品であり、オリジナル性が高い。(中略)ここでは原作名すらクレジットで出てこない。」(ガルブレイス 4 世 296 頁)実際、原作と黒澤作品ではマクベス夫人にあたる妻の鷲津浅茅の懐妊や、最終結末の大幅な違いがみられることからも黒澤がただ翻訳しただけの映画とは言えない。この事実を知って以降、私は単に「日本版マクベス」と表現することは失礼にあたり控えたいと感じた。本章ではこの双方を比較し様々な点においてイギリスと日本の文化の違いや、見せ方の違いが存在することを証明していく。そのなかでも 4 箇所に絞り①登場人物の比較、②魔女の比較、③結末の比較、そして④森の役割を考える。黒澤は日本の文化である「能」を組み込むことで日本人が見ても抵抗がない作品を作り、また独自の展開に仕上げている。ここでどうして黒澤が「能」という日本芸能をこの作品に取り入れたかを説明すると、単純に彼は「能」を好み「能」を見ることを一番の楽しみとしていたからである。「能の演出については、僕は前から大変興味を持っていました。特に、動きを極端に節約することによって、動き自体をもっとも効果的に魅せるというやり方に注目してきました。」(都築 31 頁)『蜘蛛巣城』に関するインタビューの中で黒澤はこのように答えた。実際『蜘蛛巣城』のなかに登場する鷲津浅茅は「能」の要素が強いキャラクターである。その顔はまさしく能面であり、彼女はすり足で歩く。セリフの少ない役であるがその動きにはどこか観客の目を惹きつける効果があり、作中でも大きな存在感と印象を残す。原作“*Macbeth*”のマクベス夫人が言葉で夫のマクベスを動かしたのに対し、黒澤の生み出す浅茅は行動に絶対的自信を感じた。以下主に 4 項目に分け『蜘蛛巣城』と原作“*Macbeth*”を比較する。

①～登場人物の比較～

この“*Macbeth*”という作品の主人公、マクベスという男は物語始め偉大な功績を残し主君であるダンカンに大いに褒められるも「忠勤こそが進化としての務め、それを果たせばすでにご恩賞にあずかったことになります。」(松岡 29 頁)と述べる。見てわかるとおり勇ましく忠誠心の強い人物であった。しかしマクベスの妻、マクベス夫人の助言で更なる出世(王になること)の為に主君ダンカン殺しに踏み切る。この行動がきっかけとなり彼は自分の為なら人を殺すことも簡単に行う人間になり最終的には国を狂わせた暴君となってしまう。この心の移り変わりは全てダンカンを殺した夜にきっかけがあると考える。マクベス夫人の巧みな言葉づかいでマクベスの心は一種の洗脳状態に陥り主君への忠誠心を曇らせてしまった。そして立場上は偉くなったものの心はどんどん弱くなり、その心の中の不安にさらに 3 人の魔女の不確かな助言か染み着き破滅へと繋がったと考える。将軍であった頃のマクベスなら魔女の助言に惑わされる程心が弱くはなかっただろう。そして次にマクベス夫人。彼女が初めて登場するシーンはマクベスからの手紙を読む場面である。魔女からこの先の出世も約束されたという朗報を知らせる手紙を読んだ後の彼女のセリフは以下である。

(前略) yet do I fear thy nature,
It is too full o' th' milk of human kindness
To catch the nearest way. Thou wouldst be great,
Art not without ambition, but without
The illness should attend it.
(でも心配なのはあなたの気性。
人間らしい優しさというお乳が多すぎて
一番の近道が選べない。あなたは大いな

る地位を求めている。
野心がないわけではないけれど、それに伴う邪悪な心に欠けている。)

(中略) Hie thee hither,
That I may pour my spirits in thine ear
And chastise with the valour of my tongue…(Oxford 14 頁 Act1 scene5)
(早く帰っていらっしゃい。
あなたの耳に私の性根を注いであげる…)
(松岡　32 - 33 頁)

登場するやいなや恐ろしい言葉を放つ。将来的に王になれると根拠なく告げられただけで喜び満足しているマクベスとは対照的に、ダンカンを殺し今すぐにでも夫を王にする野心むき出しの妻は根本的な性格の違いがある。この夫婦は一心同体と考える人もいるが、私は根本的に違う種類の人間で互いに影響を与える関係（この場面では完全にマクベス夫人が影響を与えているが）と考える。マクベス夫人の言葉によって作り上げられた野心あふれるマクベスのことを夫人は本当に後悔していなかったのか。夫婦として手に入れた地位を守るためにマクベス夫人も夫と一緒に考えていきたかったとはわたしは思う。しかし相談なしにバンクォーを殺した辺りから自分の存在意義をなくし疎外感と寂しさを覚えた夫人は頭が狂ってしまったのではないだろうか。彼女は後悔していたからこそ、ダンカン殺害の夜の事を思い出し手を洗う動作を繰り返し行ったと推測する。双方のキャラクターは違いあれども心の弱い人間だったのだ。

次に黒澤明の『蜘蛛巣城』でマクベス、マクベス夫人にあたる鷲津武時、浅茅のキャラクターについてＤＶＤを参照し考える。DVD の説明蘭には「もとより権力欲の強い武時は、妻の勧めも手伝い主君を殺害….」とある。私がここで最も注目したいのは浅茅である。先程も述べたように「能」の要素を取り入れたキャラクターであるため、彼女はすり足で歩き喋り方も感情的でなくどこか不気味である。もし自分がこの女性に何か言われたらと考えると刃向おうという気持ちは浮かばず従わざるを得ない。説明欄と私の見解は異なり、『蜘蛛巣城』の武時は妻に最終的には従う人物であったと考える。そして妻である浅茅は、恐ろしい。

最後に夫婦関係の違いについて考える。“*Macbeth*”では冒頭からダンカン殺害後まで、夫婦一体となり高い地位の獲得に突き進む印象を受けた。そして物語中ほどから結末まで、二人の心が徐々に反比例して行く様子がうまく描かれる。一方で『蜘蛛巣城』では原作より夫婦の一体感が弱い。浅茅は謀反をそそのかし、また懐妊したといい養子を迎えることを拒む。この様子は、マクベス夫人とは本質的に違うことを表している。マクベス夫人はダンカン殺害で夫が最高位につくまでは出世の手助けをするが、それ以上は望んでおらず、むしろマクベスがひとり暴走する様子に悲しみを覚え、止めようとする。マクベス夫人が狂ってしまった一番の原因は、夫の心が自分から離れ、独走してしまったことである。一方で浅茅は夫を破滅へと導く決定打となる懐妊発言をしており、最後、狂乱していたが、最終的に死亡しているか否かのシーンが描かれていないことから、浅茅の夫への忠誠心や愛情に私は疑念を抱いた。そして狂う理由があまりわからない。推測にすぎないが、浅茅は生きており、武時の死後もうまい具合に高位で暮らすのではないかと思ってしまった。

②～三人の魔女と一人のもののけ～

まず、原作“*Macbeth*”で強烈なインパクトを放ち、舞台化する上でもその演出方法に注目が集まる三人の魔女について考える。この魔女たちは原作でマクベスを、自身の破滅へと導く存在、またシーン切り替えの際に登場し、わけのわからないことを喋り、観客を不気味にも楽しませる効果を持つ存在である。原作の冒頭は３人の魔女の会話で始まるが印象的なセリフで幕が開ける。

Fair is foul, and foul is fair, Hover through the fog and filthy air. (Oxford １頁 Act1 scene1)
きれいは汚い、汚いはきれい。飛んで行こう、よどんだ空気と霧の中。(松岡 10 頁)

原作を最後まで読み切ると、このセリフの意味が推測できるが冒頭部分では見当もつかない。有名

なこのセリフは話の全体を表すと言えるだろう。しかし黒澤はこれを１人のもののけとして描いた。森の中で突如現れ、しかも小屋付きでなにかを編んでいる様子は、原作の魔女のイメージとは異なる。そして性別も男か女かわからない、汚いもののけであった。この違いは文化の違いを反映しており、日本には魔女という存在概念はなく、西洋の文化である。これはちょうど野村萬斎構成、演出の舞台『マクベス』にも共通していることで、彼の舞台でもまた、男のもののけのような魔女役が登場した。しかし魔女を日本の文化に当てはめるとももののけになるというのは多少無理やりなことである。もののけは本来、「人にとりついて祟りをするといわれる生き霊、妖怪の類」と定義づけられているが、原作で登場する魔女というものは、悪魔から不思議な力を授かった人間であり、生きている。魔女と同等な概念が日本に存在しなかったことをふまえると、このもののけというベースに、少し魔女らしい要素（ぼさぼさの髪の毛、人間的な外見）と、よくわからない糸紡ぎの行動を加えて、奇妙な存在に仕上げたのだろう。「白い衣装に身を包み、白い髪と白い顔をした妖婆は、能の痩女を思わせる。糸車を回す妖婆の小屋も白い光に照らされ、この世のものとは思えない。」(ガルブレイス４世) とある。魔女にあたるこの妖婆をはじめ、物語全体の不穏さや不気味さを映像で表す際、この映画が白黒映画であることが重要なポイントだ。この映画が製作された 1956 年はまだ白黒映画が残る時代でちょうどカラー映画が主流となる直前である。白黒映画がこの作品の不気味さや謎めいた森をさらに強調していることは間違いない。実際ドナルドリーチも「これより黒さにまさり白さにまさるモノクロ映画はない。」と高く評価している。しかしやはり私は、魔女の概念がない戦国時代、あのもののけの予言を信じる鷲津武時というストーリーは少し不自然な部分だと思う。当事者になると物事を客観的に考えられなくなることを想定すると可能かもしれないが。

③～結末の違い～

私がこの二作品における違いの中で最も重要だと考えるのが結末の大きな違いである。原作“*Macbeth*”の結末はスコットランド貴族のマクダフがマクベスを倒し、ダンカンの息子であったマルカムが新しい国王となり結果的には明るい未来がみえる。一方で『蜘蛛巣城』の場合、武時がなんと家来たちに矢で殺される。一体誰が指示したのであろうか。日本人の特徴として、間違ったことをしていると思っても周りにあわせて、上の者の指示に従う傾向にある。このことから、最終的に武時を殺そう、この君主についていくのはもう限界だと、家来の武士たちの心をひとまとめにして作戦を練っていたトップがこの中にいるはずである。そしてこの下剋上はまた、新たな武時的存在を産む危険性がある。“*Macbeth*”で、マクベスの暴君ぶりをおかしいと思い、家族を捨ててまでひとりで行動したマクダフや、立ち上がったマルカムとは、この面でも人間性の違いがある。原作の結末を予想する観客の気持ちを大いに、いい意味で裏切り驚かせた黒澤にははっとさせられる。この『蜘蛛巣城』のラストシーンは実際の矢が使われ三船敏郎演じる武時に向かって何本もの矢が放たれた。「極限状態を作りだし、その様をまるで能舞台のように、引きで追い続けるカメラ。こうして、三船の演技を超えた恐怖が画面から滲み出す伝説のシーンが生まれました。」(熊沢 146 頁) ラストシーンの大きな違いは黒澤の完全オリジナルであり単に翻訳した映画でない事を示す。結末が違えば全体の印象や今後の展開予想がまるで違う。黒澤は映像で魅せることが仕事である為、弓矢の名手に本物の矢を打たせ演技ではできないリアルな恐怖を表現した。舞台でセリフを重要とするシェイクスピアが耳で魅了したように、黒澤は目で観客を映画に引き込むことに成功している。いずれの作品の結末も私は素晴らしいと感じるが希望が見える終わり方はやはり原作の方ではないか。

④～「バーナムの大森林」と「蜘蛛手の森」～

原作でバーナムの大森林が登場するのは第４幕第１場、幻影３が「マクベスは決して敗れない、バーナムの大森林がダンシネインの丘に向かって攻め上がって来ないかぎり。」という予言を告げる場面であり、物語後半で初めて登場する。一方『蜘蛛巣城』では、タイトルに「蜘蛛の巣」が使われて

おり、また武時がもののけに出会った場所、蜘蛛の巣城を無敵にしている守りの森であることを武時が述べるなど、多くの場面でこの森が登場する。魔女とものけの予言内容と、最終的に森が動いたことに変わりはないが、森の存在感がより強く、物語冒頭から終わりまで印象強いのは、「蜘蛛手の森」であろう。そして、蜘蛛巣城を守る、防壁代わりの強い味方的存在であった森が最終的に武時に焦りをもたらし、味方のはずの家来らによって殺される様子が結末で描かれる。味方によって破滅した武時の様子がより強調されている。黒澤の映画は主に「蜘蛛手の森」周辺での出来事に納まっているが、原作では描かれる場所が「スコットランドおよびイングランド」と幅広く設定されている。ここにも島国日本と、島国ではあるが複数の国で構成されることの違いが反映されている。狭い範囲で物語を進める黒澤のやり方は、物語全体にまとまりをもたらし、さらにタイトルとこの重要な「蜘蛛手の森」をリンクさせたことで、森の重要度が始めからわかるつくりになる。黒澤の演出はこのようなあたりまえで気付かない文化の違いにもこだわっており、素晴らしいとしか思えない。

Ⅳ　まとめ

ここまで様々な相違点について探ってきた。シェイクスピアの作品を題材にした作品は他にもアーサー・ローレンツの“West Side Story”(1957 年初演) 等が有名であるが、ここまで忠実にストーリー展開を同じにしてつくられた作品は珍しい。シェイクスピアの“*Macbeth*”を鑑賞したことのある私は黒澤の「日本文化にあてはめた映画」に感動したし、それであってラストシーンをオリジナルにし観客を、そして演者をも驚かせた黒澤のいたずら心の様なものに刺激を受けた。彼は映画を作ることが仕事であったがそれ以前に一番楽しんで作品を作っていたと想像でき、彼の納得のいく面白さに触れたとき、我々は感動し、新たな発見ができるのだ。ウイリアム・シェイクスピアと黒澤明は遠く離れた国で生まれ活躍した時代も異なるが、芸能を楽しみ情熱を精一杯注いだことに変わりはない。

註

1　ここで取り上げた黒澤明の経歴は主に筑摩書房編集部『黒澤明 －日本映画の巨人－』筑摩書房　2014 年を参照した。

参考文献

William Shakespeare“*Macbeth*”Oxford
松岡和子訳『マクベス』筑摩書房　1996 年
小林信彦『黒澤明という時代』文藝春秋　2009 年
都築政昭『黒澤明の遺言』実業之日本社　2012 年
筑摩書房編集部『黒澤明 - 日本映画の巨人 - 』筑摩書房　1996 年
ステュアート・ガルブレイス 4 世『黒澤明と三船敏郎』亜紀書房　2015 年
川村蘭太『黒澤明から聞いたこと』新潮社　2009 年